

平成21年度校内研究の概要

1 今年度の研究の方向性について

(1) 昨年度の成果と課題

※H20年度成果と課題 参照

(2) 研究の概要

テーマ「ひびき合う三の丸の子どもたち」 ➡ 継続

研究課題・・・切実な問題意識を持ち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成

➡ 今年度から

◎手だて・・・子どもの「切実な問題」を見とった授業づくり ➡ 今年度から

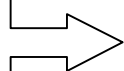
・・・豊かな言語活動のできる子どもを育てるための研修 ➡ 今年度から

①研究課題と手だて設定の理由

子どもの知的好奇心をもとに単元をつくることは、昨年度の研究である程度共通理解し実践できたと考えている。しかし、子どもの知的好奇心が、必然性を持った問題となったかという点で疑問が残る。下に示す「授業をつくる」「単元をつくる」定義の中の、「必然性を持って問題発見・問題解決する」部分が欠けているのではないかということである。これからは、「何となくおもしろそうな課題」で「進む学習」をする子どもではなく、「本気で問題や友だちと関わろうとする」主体的な子どもを育てていきたい。その時の子どもの切実な問題意識とは何かを教師が見とり、子どもと共に学習をつくっていく過程で、単なる「関わり合い」ではなく「ひびき合い」の姿が見られると考えている。

そこで今年度は、「知的好奇心」と「子ども同士が関わり合う」ことは大前提として課題と手だてからははずし、教師が子どもの切実な問題とは何かを見とり、授業をつくることを手だてとしたい。

「授業をつくる」
「単元をつくる」



友だちや教師との関わりを通して、必然性を持って問題発見・問題解決しながら学習が進む過程のこと。最終的には、単元のねらいを達成する。

②研究仮説

子どもの切実な問題を見とり授業をつくることで、ひびき合う姿が見られる

③研究方法（具体的な方法は後述）

一人年一回研究授業（国語、社会、算数、理科、生活、生活単元学習）、レポート報告会

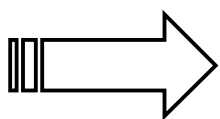
2 具体的な研究方法

(1) 授業のありかた（H20年度研究概要参照）

①教師の与えた教材・課題から、子どもの問題意識が生まれる学習

②子どもの問題意識がスタートかつゴールの学習

③子どもの問題が連続・発展する学習



どれがいいということではない。また、子どもから出たものでなければならないということでもない。子どもの切実な問題意識を教師がどう見とり授業をつくるかが大切。**教師・子ども・地域の個性を生かしてほしい。**

(2) 授業形態

様々な場面で、その時に必然性を感じられるような授業形態をとる。ただし、前提は、**一人ひとりが自分の考えを持っていること。**

(例) クラス全体 グループ ペア . . .

(3) 授業研究

①研究する教科、条件 (H20年度研究概要参照)

全ての単元を(1)で述べたような方法でつくっていくことは無理なので、研究授業で行う単元について、子どもの切実な問題がどこにあるのかを見とり、授業をつくっていく。

②研究授業を行う時の留意点

- その一時間だけでなく、単元を通して、教師が子どもの切実な問題をどうとらえ、子どもたちは友だちや教師とどのように関わり合いながら、単元目標に達していくのが大切。子どもが切実な問題として考えたことを扱う場面を研究授業として行う。
- 始めにたてた単元指導計画通りにいかななくてもよい。あくまでもそれは計画。子どもたちの持った課題や思考の流れによっては、途中で変更もあり得る。

③授業研究の持ち方

- ブロックで全体研究会、ブロック研究会、参加者による選択制の授業研究の3種類。

④授業研究の視点

- 本時の学習問題は適切であったか (子どもにとって切実な問題であったか)
- ひびき合いが見られたかどうか。
 - ・見られなかったとしたら、どこに問題があったのか。
 - ・見られたとしたら、どこがよかったのか。

(4) 実践レポート報告会 (年4回)

- ・6月8日(月)…「聞く」「話す」という、学習活動の基礎基本となるようことへの取り組み方法。
- ・8月…授業実践レポート。夏休み前までの実践で知的好奇心に関わること
- ・12月…授業実践レポート。冬休み前までの実践で知的好奇心に関わること
- ・2月…5月の報告会を受けて、子どもたちに「聞く」「話す」という力が育ったか、改善点はどこか等、具体的な子どもの姿を報告。